

ルネサンス … ———▶教科書p.90

私のいとしい人よ

【作曲者】

ラッソ (Orland di Lasso, 1532-94, ラッスス Lassusともいう) は、現在のベルギー南部モンスに生まれ、イタリアなどにおける活動を経て、1556年以後はミュンヘンのバイエルン公宮廷に仕え、およそ30年間にわたって楽長をつとめた。宗教音楽を中心に膨大な数の作品を書き、イタリア語、フランス語およびドイツ語による世俗音楽も残した。ルネサンス後期ではもっともヨーロッパ中に名を知られた作曲家であった。

【楽曲について】

滞在経験からイタリア語世俗音楽に通じていたラッソは、最初の出版曲集(1555年)にすでにマドリガーレを含めている。1581年にパリで出版された『カンツォーネ集』は、より民衆的で親しみやすいイタリア語の歌を集めた曲集で、この作品(原題: Matona mia cara) はその中に含まれていた。イタリアでテデスカと呼ばれたドイツ人の、下手なイタリア語と無骨な振る舞いを揶揄した内容で、マトナ Matona とはマドンナ Madonna をドイツ風に発音したもの。

(歌詞大意) 私のいとしい人よ、私の歌を聞いてくれ。窓辺で歌うこの私を良い連れ合いとは思わぬか。私とおまえはぴったりだ、ギリシアの酒と若鶏の料理のように。一緒になってくれるなら、怠けたりせず一晩中でも働くぞ。羊のように働くぞ。ドン、ドン、ドン。ディリ、ディリ、ドン、ドン、ドン。

【鑑賞のポイント】

ドイツ訛りがつよいイタリア語でありながら意気消沈せずにイタリア女性に愛を伝えようとするドイツ人兵士の姿を、4声部の簡潔な作品のなかでユーモラスに描いている。ドン、ドン、ドンという反復部分は、特に意味はないが、歌詞と対になって効果をあげているところも感得したい。

(美山良夫)

バロック …

オペラ「オルフェオ」

【作曲者】

モンテヴェルディ (Claudio Monteverdi, 1567-1643 [イタリア]) は、ルネサンスからバロックへの大きな変化の時代に、新しい音楽の開拓者として活動した作曲家である。生地クレモナに近いマントヴァ宮廷に仕え、1613年にヴェネツィアのサン・マルコ聖堂に迎えられた。世を去る直前にも相次いでオペラを完成するなど、精力的な活動をつづけた。この間、音楽様式の変化を反映しつつ8巻のマドリガーレ集を刊行している。

【楽曲について】

宮廷楽長をつとめていたマントヴァで、1607年の謝肉祭期間に初演されたオペラで、台本はアレッシアンドロ・ストリッジオ (Alessandro Striggio, 1573-1630)。モンテヴェルディにとって初のオペラであるとともに、このジャンルにおける最初の音楽的に重要な成果でもある。当初から高く評価され、直ちに再演され、2年後には楽譜が出版された。オルフェオの物語は、プロローグに続いて、妻エウリディーチェとの幸福(第1幕)が、彼女の突然の死により暗転(第2幕)、妻を取り戻すため黄泉の国に向かう決意(第3幕)と、成功しかけた救出の破綻(第4幕)、天に招かれるオルフェオ(第5幕)という五つの幕に分けられている。

【鑑賞のポイント】

オペラの特徴である対比性が、第3幕を中心に、その前後に悲劇的な内容の幕をおき、さらにその前後に幸福な情景をおくというシンメトリー構成によって実現している。

当時としては異例の、作曲者による楽器の編成や使い方に関する指示があり、それがプロローグ冒頭に奏されるトッカータと名付けられた序奏や、歌詞内容と結びつけられ、また技巧的な装飾をつけた歌唱方法も示されている。こうした表現意志の強さとその効果に着目したい。

(美山良夫)